

生活指導における権威と自由

保育効果の研究(上)

村山 貞雄 多田 淑子
高橋 種昭 植松 治子
日名子太郎

一、実験的研究の採用

効果とは、技術にともなう用語であり、技術の結果生じた変化を、一定の価値意識をもって測量することである。

この測量にあたって物体の場合は、測定の日盛りや測量の方法に問題が少なく、精密性が要求されるだけである。しかし教育の場合には、複雑な人間発達について測量しなければならぬために、その方法が困難であり、尺度の使い方にしばしば行きづまりを感じる。たとえば私も共同研究者のなかにも数的な統計に反対した人があ

る。
現在客観的な日盛りは、知能検査のような二、三のものを除いて、まだ発見されていないといえる。

幼稚園の学簿簿につけられる三段階の相対評価は、主観性のなか

に単純な形(三段階程度)の客観性を求めようとした尺度である。

ことに幼稚園は、小学校や中学校のように体系のある文化遺産に関する知識や技術を教育することは比較的少なく、性格面の全体的な陶冶が多いので、効果の測定方法が非常に困難である。

しかし保育技術は、この効果の測定の困難を克服しなければ、その向上がむずかしい。私たちはその優れた方法として、あえて自然科学に発達した実験法を採用してみた。

すなわち教育学は効果に関する研究を中心とするが、この効果に関する研究は、自然科学の手法を借りて実験的におこなうことによつて、一その進歩をとげるであろうと考え、昭和三十三年から三十四年にかけて、実験的な調査をこころみた。その結果は、調査人数の少なかつたことや実験手つづきの不馴れなことなどから不満足な結論しか得られなかつた。しかし、実験の結果でなければ得られ

ないと思われる点も各所に発掘でき、こんごの研究の手がかりを得ることもできた。この調査の概要については、昭和三十四年度の日本保育学会に発表した。

なお、実際の教育にたいして実験的に研究をおこなうことは、種々の点で疑念をいだく人が多いと思うが、このことについては、後で述べたい。

二、全体の計画と幼稚園における問題点

実験の目的 幼稚園教育の内容のうち、現在、問題となっており、しかも保育時間の多くをそれに費やしているものをしらべたところ、「生活指導」と「絵画」と「劇」が浮かび上がった。この三つは幼稚園でかなり熱心に指導しているにもかかわらず、その方法と効果の関係がはっきりしないところが多い。

そこで、この三つの内容について、二通りの方法で指導をおこない、どちらが効果的であるかを統計的にみようとした。

実験内容の選択 幼稚園の保育方法で問題となる点をしらべたところ、つぎの三つの点がめだつた。

(A) **生活指導** 現在道徳教育のことでずいぶん問題となっているが(注一)幼稚園においても相当数の先生が、生活指導を、納得を重んじる自発的指導でなければならぬと強く信じ、これ以外の保育方法などとも考えられないと思つているのにたいして、一方では強制的、命令的な生活指導がかなり広くおこなわれているという

事実がある。また都市でも、強制的な教師が担任であった幼児は小学校に入ってもあまり困らないといつて、父兄がかえつてよろこぶ傾向がある。

(注一) 現在問題となっている道徳教育の問題点も、道徳教育の時間を設けて權威的、形式的におこなうことにたいする反対によるものである。

(B) **絵画** 保育要領に「教師は幼児に絵の手法を与えたり、描くものを示唆すべきでない。各幼児は表現すべき自己の思想を豊富に持っている。描きたくなるような環境を作ることが望ましい」(六十九頁)とある。このようなことも影響して、絵の指導は環境を設定することによつて、子どもに描こうという気持を伸ばさせる自由画でなければならぬという信念をもち、具体的な絵の指導を全然やらない幼稚園がある。

また幼稚園の先生を養成している大学や幼稚園教諭養成所の大部分では、そのような講義をし、そのような信念をもつた先生が生み出されている。また幼児教育に影響力の強い図画教育の団体がそのような主張をしている。

ところが、幼稚園によつては、絵について、かなりはつきり指導しているところもある。また自由画しかやっていない幼稚園の先生のなかにも迷つている人が多い。

たとえば沖繩に行つたときも幼稚園の先生が一番困つている問題として、内地の先生が自由画でないといけないと言つて帰るので自由画にしているが、どうも効果があがらないという問題をとりあげている。(幼児の教育五十五巻二号参照)

また都市では諸所に画塾ができて、かなり多くの子どもが画塾にかよっているが、ここでは典型的な課題画がおこなわれており、静物を与えてかかせることがほとんどで、親たちはこれをよろこんでいる。

以上のような結果から、自由画と課題画の問題は、冷静に客観的に考える必要があると思われた。

(C) 劇 幼稚園では学芸会などで、劇の発表がよくおこなわれており、その指導にはかなりの時間が費やされているが、ここにも同様な問題があらわれている。すなわち、その大半は、あそびというよりは、むしろ保護者に「見せるため」ということを目的とするため、劇としての効果を期待し、そのため、著るしく幼稚園の保育の主旨から逸脱してしまったと思われるような過度の練習をおこなわせたり、ひどい場合には、学期末の一、二か月は、全園がそれ以外を全くかえりみないといった嘆かわしい状態もある。

実験の目的 以上の三つの問題は、結局形式を与えて権威にしたがわせる方法と、納得によって自発的におこなわせる方法の優劣の問題となる。

そこで、この二つのやりかたについて、効果の差を統計的にしらべたが、その内容と方法については、「日本保育学会第十二回大会発表要項」七十四頁～八十九頁を参照されたい。

三、生活指導の効果

生活指導の実験と結果については、「幼児の教育」(五十八巻九号)に述べられているが、ここに各内容について効果を述べよう。

調査児全体の傾向 調査児全体でAの場合、指導以前に出来ていなかったもの三百六十六人のうち指導後出来るようになったものが百七十六人(四十八%)で、Bの場合は、調査以前に出来ていなかったもの三百六十七人中指導後出来るようになったものが百八十八人(四十九%)となり、その割合の差の有意性は χ^2 検定で信頼水準八十%となり、AとBとでその結果に差があるとはいえない。

以上のことから、生活年令、性別などを考えず全体の傾向としてながめた場合は、指示のし方が権威的に形式を与えるものと自発的に考えさせるものとで、その効果に違いがあらわれないということがわかった。

性別の傾向 これを性別で考えると、男子はAの場合は指導以前に出来ていなかったもの二百十四人中指導後出来るようになったもの九十三人(四十三、四%)で、Bの場合は、指導以前に出来ていなかったもの二百二十五人中指導後出来るようになったもの百十三人(四十九、八%)となり、Bの場合が、指導後出来るようになったものと指導後も出来ないものがほとんど同数であるのに、Aの場合は指導後出来るようになったものの方がやや少ない。この差の有意性は χ^2 検定で信頼水準二十%となり、Bの方にややよい結果がみられる。

女子は、Aの場合、指導以前に出来ていなかったもの百五十二人

中指導後出来るようになったもの八十三人(五十四、六%)で、Bの場合、指導以前に出来ていなかったもの百三十二人中指導後出来るようになったもの六十七人(四十七、二%)となり、Aの場合の方が指導後出来るようになったものの割合が多い。これは、その差の有意性は χ^2 検定で信頼水準三十%となり、ややその傾向を認めている。

すなわち、男子は納得によって自発的におこなわせる方法の方が効果があり、女子は反対に権威的に形式を与えてそれに従わせる方法の方に効果がみられるといえる。(発表要項七十七頁)

年令別の傾向 次に生活年令別にながめると、三、四才はAとBの効果の差は水準5%で有意で、AよりBの方がよい結果がでたことを示し、六才は、統計的には水準30%ではあるが反対にBよりAの方がよい結果がでたことを示している。五才は、AとBとは、同じ傾向で、統計的にまったく差がみられなかった。

すなわち、三、四才のころは、納得によって自発的におこなわせるやり方のほうが効果があり、五才では、その傾向が消えて、とくにどちらの方法がよいということが明らかでなくなるが、さらに成長して六才台になると、納得によって自発的におこなわせるやり方より権威的に形式を与えてそれに従わせるやり方のほうがかえって効果があるということがわかった。

なお、これを性別でみると、三、四才は男女ともにAよりBの方がよい結果がでていて、その差の有意性は統計的にもかなり高い。

第一表

年令	指導形式	性別	×○	××	AとBにおける効果の有意性	効果のあらわれ
三・四	男子	A B	10 20	24 22	P = .20	A < B
	女子	A B	10 14	14 7	P = .10	A < B
五	男子	A B	41 44	52 37	P = .20	A < B
	女子	A B	30 16	26 26	P = .20	A > B
六	男子	A B	42 49	45 53	P = .95	A = B
	女子	A B	43 37	29 42	P = .20	A > B

五才は、男子がAよりB、女子がBよりAと全く反対の傾向を示し、その有意性は、いずれも信頼水準二十%であった。六才は、男子はAとBはまったく統計的には差がなく、女子が、五才の女子と同じくAの方がBよりよい結果がでていることを示している。

このことから、三、四才ではまだ性別の違いがなく、ともに納得によって自発的におこなわせるやり方のほうが効果があるが、五才以上では性別による効果の違いがあらわれてくるといえる。

性別の傾向のところでも述べた男子の特徴、すなわち納得によって自発的におこなわせる方法に効果があるというこ

とは、五才でとくにあきらからかで、六才になると二つの方法の効果の違いはあまり見られなくなっている。女子では、五才でも六才でもともに権威的に形式を与えてそれに従わせる方法のほうが効果のあることがわかった。

(第一表参照)

知能別の傾向 幼児の知能によって効果に違い

があらわれるかどうかみるため、調査児のうち、知能指数九十九以下のグループと知能指数百三十以上のグループをとりだして、この二群で比較検討してみた。幼児全体としては知能指数九十九以下と百三十以上のグループでは、いずれもA∨Bの傾向がみえるが、その差の有意性は信頼水準三十%、五十%と余り高くない。これを生活年齢別にみると、三、四才の知能指数九十九以下と百三十以上、五才の知能指数九十九以下の三つのグループは、A∧Bで統計的にもややその有意性がみとめられる。なお、これは頻数が少ないため修正値を求めて検討すると、さらに信頼水準は低く三、四才ではAとBの差がみとめられない。五才で百三十以上、六才の九十九以下、百三十以上の三つのグループはいずれもA∥Bで、A形式でもB形式でも変化のないことを示している。

以上の結果、知能の低いものおよび生活年齢の小さいものには、納得によって自発的にやらせる方法の方がよいが、五才で知能の高いものおよび六才台では、二つの方法のちがいがみられないということがわかった。

それでは知能が同じ程度のグループの場合、性別による差があるだろうか。このことをしらべたところ、第二表のようになり、九十九以下のばあい、男子は \neq 検定によると信頼水準十%でA∧Bを示しているのに、女子はA∥Bである。IQ百三十以上のばあい、男子が \neq 検定により信頼水準二十%でA∧Bを示しているのに女子はやはりA∥Bである。(なおこれらは頻数が少ないためいずれも修正

値による検定をおこなった。)

すなわち、知能の高いものも低いものも同じように男子は納得により自発的におこなわせる方法に効果がみられる。なお、これは知能の高低を考慮せずに性差をみた場合の男子の傾向と同じである。しかし女子は知能の高低を考慮せずにみた時の傾向が知能の高いものにも低いものにもあらわれず、ともに二つの方法における効果の

第二表

知能指数	性別	指導形式	○×	××	AとBの有意性 Aは差	効果のあらわれ方
九十九以下	男子	A B	10 16	16 8	P=,10	A<B
	女子	A B	5 5	6 9	P=,95	A=B
百三十以上	男子	A B	15 11	17 8	P=,20	A<B
	女子	A B	21 9	13 7	P=,99	A=B

あらわれ方にちがいがみられない。このことから知能の程度がふつうの段階(百から百二十台)の女子に、女子の傾向として、すでに述べた権威的に形式を与えてそれに従わせる方法が効果が高かったといえると思う。

親の育児態度と保育効果 生活指導は親の育児態度にも随分影響すると考えられる。ここでは親の育児態度を過保護、

ふつう、放任、の三つに分けて担任教師に記入してもらい極端な過保護、放任の二つのグループのちがいをみた。過保護の場合、A∧B

でその有意性も信頼水準十％であり、男女ともにAⅡBとなっていた。放任の場合はAⅡBで男女ともにAⅡBとなり差の有意性は低く、信頼水準九十九％と九十％である。(発表要項七十九頁参照)

以上の結果、親の育児態度が同じ場合は、性別のちがいがみられず、家庭で過保護の場合は納得により自発的におこなわせるやり方が効果があるが、家庭で放任の場合は二つの方法による効果のちがいが認められないといえる。

なお、指導以前に出来なくて、指導後出来るようになったものの割合が全体の傾向としては、五十％前後であるのに、放任の場合は三十五％前後でとくに低く、幼稚園での指導が家庭にまでおよぼすことが少ない。

つぎに親の教育的理解が高い、ふつう、教育的理解が低い、三つに分け教育的理解の高いものと低いものでそのちがいがあるかをみたが、いずれもAⅡBで差がみられなかった。

すなわち、親の教育的理解の高低は、二つの方法の効果には影響しないとみられる。

結論 幼児全体の傾向をみたときは、指示のし方が、権威的に形式を与えてそれに従わせる場合と、納得によって自発的にさせる場合とで、効果に差がないが、男女別にこれを見ると、男子は、納得により自発的にさせる方が効果があり、女子は権威的に形式を与えてそれにしたがわせる方が効果がある。

なお、これを生活年令別にみると、この傾向がとくにめだつのは

男子のばあいは、五才台で六才になると二つの方法における効果のちがいがあまりみられなくなる。女子のばあいは五才台でも六才台でもとくにみられる。

なお、三、四才のころは性差がきらかでなく、男子も女子も納得により自発的におこなわせるやり方が効果がある。

知能別にみると、知能の低いものも高いものともに男子は納得により自発的におこなわせるやり方の方に効果がみられたが、女子は二つの方法における効果のちがいがあらわれなかった。

生活年令も加味して検討した場合頻数が少なくあきらかではないが、知能の低いものおよび生活年令が小さいものは、納得によって自発的にさせる方がややよく、五才で知能の高いものおよび六才台では二つの方法のちがいがなくなることがわかる。

親の育児態度を過保護、ふつう、放任に分けた時、同じ場合は性差がみられず、家庭で過保護の場合は、納得により自発的にさせるやり方の方が効果が大きく、家庭で放任の場合は、二つの方法による効果のちがいがみられない。なお放任のばあは指導効果のあらわれ方がどの方法によっても小さい。

四、今後の課題

現在幼稚園の生活指導は、日常生活の基本的習慣のしつけが中心に考えられている。子どもがもっている力が自由にのびのびと成長することをうながす保育とあいまって、つねに社会的制約を考えて

行動するということを理解させる保育もあるわけで、生活指導がそれにあたる。とくに基本的な生活習慣は、どうしても身につけねばならない最低限のものであり、その指導にあたっては、他の保育内容のようにどこまでも子どもを中心に自発的なものを待つばかりでは効果があがらない場合も多く、やや強い働きかけも必要であると思われる。

今回の研究結果は、その実験的制約から、このままをすぐ實際保育に適用できないであろうが今後の保育の参考になりそうなところをひろってみる。

全般的に約束や命令的な指示による指導方法にもかなりよい結果がみられるということがあげられる。とくに女子にこの傾向が強い。もっとも男子は自発性にまつ方がよいようである。

幼稚園ではいままで、同じように指導したばあい、この研究結果にみられるような男子と女子とのちがいが余り考えられていなかったのではなからうか。それも年少組より、一斉保育の機会の多い年長組にその傾向があらわれているという点などは見のがせないと思う。なお、女子には男子以上に、このことが能力の高低とその指導の効果のあがり方に関係がありそうである。

つぎに、家庭のしつけの態度がちがうと、指導の効果にちがいが出てくるということが、今回の研究結果にもはっきりみられる。

家庭で放任の子どもはどのような方法もなかなか効果をあげえないし、家庭で過保護の子どもは、男女ともに約束や命令的な指示は

余り効果がないようである。幼稚園に入るまでにすでにうけてきている家庭でのしつけの態度は、深く幼児に浸透し、ものの方やうけとり方に大きく影響しているから、生活指導の場合は特にそれをじゅうぶんのみこんでひとりひとりに当ることは当然である。なお、幼稚園での生活指導は家庭に帰ってからの生活でその真価が発揮されるものであるが、幼稚園での生活指導の内容が、家庭に帰ってからも幼児にとつて矛盾なくそのまま移せるような心づかひも忘れられないと思う。

今回の実験は、ことばで指示を与えるという形式を用いたが、それ自体やや強制的なおいがあり、あまり良い方法だったとはいえない。しかしことばで指示を与える場合でも、強制的なものと同発性にまつものとのわけられるはずで、そのような小さい小ぢなちがいからも、それをうけとる幼児によつて、いろいろと効果の差があらわれるとすれば、広いいみでの指導方法のちがいがらからの効果の差は、もっと重視されるべきであらう。自由保育の良さが強調され、それ一本やりの幼稚園も少なくないうのだが、指導内容によつては、強制的な指導方法も上手に利用して効果があげられると思う。

☆ ☆ ☆